

ポスト冷戦の現代、異なる文化の接触がもたらす葛藤が国際社会に与える影響は、ますます大きくなっている。ドイツにおいては、度重なる国土の変更、外国人労働者の受け入れ、難民の流入などによって、現実には多様な文化が社会に存在し、ドイツ文化と異文化との関係の構築が議論されてきた。なかでもベルリンは、迫害されたフランスのユグノー教徒が多く移住し、第二次大戦まで世界でもっとも多くユダヤ人が住む都市であり、冷戦時代に二つに分断された都市の西側では、人口の3割をトルコなどの外国人が占め、アジア・アフリカから難民が押し寄せた。東西ドイツ統一後は、東ヨーロッパからの難民が目指した都市であり、同一のはずの東西ドイツの文化の違いが露呈した場でもあった。

このように、現実には国家に先行して文化的多様化が進行していたベルリンでは、冷戦の終焉以前、東西ドイツの分断という政治的状況が、社会における文化の多様性の存在そのものに対する肯定と否定双方の主張を生んでいった。文化的に多様

ドイツにおける文化の多様性

薦木文湖

な特別な都市として、孤立した都市・西ベルリンの国際的な価値を高めようとする肯定論と、「ドイツはひとつ」との政治的方針からその共通性を担保するドイツ文化の存在のみを主張するものである。

しかし、東西ドイツが統合し大量の難民を受け入れた一九九〇年以降、人々の中で文化の多様性が現実として受容されはじめる。ベルリンにおいてドイツ文化と多様な文化の関係が論じられた論争では、文化的多様性が存在することは前提となり、どのような成員がどのような共通の基盤のもとで社会を形成するのかが議論されたのである。

このベルリンにおける議論のように、異なる文化の接触は、社会のありかた自体を問い、その変化を促していく可能性をもっている。異なる文化同士がお互いに影響を与えあうのであり、それゆえに文化の多様性は社会に葛藤や対立をもたらす側面があるのである。こうした文化の接触と変容は宗教の国際的な伝播の過程にも見られると考えられ、今後、課題の一つとして検討していきたい。

(つたき・ふみこ／東洋哲学研究所委嘱研究員)